

## 21 世紀にキリストを生きる

「声なき者の友」の輪 柳沢 美登里 「祈りの通信」

第24号（2020年11月）

### 「神のとき（カイロス）」その3 ～新型コロナ世界大流行～

「一年間、この通信を出せなかった・・・。」 今、パソコンに向かい、この原稿を打ちながら驚くべき激変に揉まれた2020年を振り返っています。

年初からあっという間に世界中に広がった新型コロナウィルスは、地球上のあらゆる国々と地域で「日常」を一変させました。私への「新型コロナ直撃」は2月半ば過ぎ、初のイスラエル訪問出発2日前に一通のメールでやってきました。「イスラエル政府が日本をコロナ汚染国と認定したため、日本のパスポートを持つあなたは入国できません。至急、旅行を取り消してください。」海外渡航歴30数年にして初めてのドタキャンでした。一年近く祈り、期待していた初訪問が消滅した瞬間です。「なぜ、今、世界大流行が始まったのですか？主よ・・・。」呆然とし、力が入らない数日を過ごしました。日本でコロナ感染への危機感が高まった3月末より1か月以上も前でした。発火点の中国や対応が素早い韓国、さらにヨーロッパやアメリカから遅れて4月初めに日本で「緊急事態宣言」が発表されたころは、一か月前倒しで「緊急事態」モードで動いていた私は、すでに「新日常」モードに移行していました。「一足先の直撃」は、備えるようにという主の采配だったことを思いました。

3月末には、国際協力に関わるバングラデシュ、インド、エチオピアの政府が全国規模の「長期ロックダウン（都市封鎖）」を宣言し、同労者たちから「しばらく動けない」というメールが次々に届きました。人々の移動、仕事場への出入りが突然制限され、各地域は大混乱に陥りました。主の導きで列車が止まる数時間前に滑り込みセーフで家族のもとに戻れたという証し。交通網が完全ストップしたロックダウン時に母親が亡くなり、地上での別離である葬儀に参列する機会を失った悲しみを覚える兄弟のための祈り。「新型コロナウィルス」により、世界中の人々が手に汗握り、ときに途方に暮れ、ときにどん底で小さな希望の光を見出す、それぞれのドラマを体験していたように思えます。

秋が深まるにつれ、北半球の欧米諸国から第二波、三波といわれる感染者激増が報告されています。日本国内では幸いにも激増までには至っていませんが、飛沫や接触感染を防ぐために交通機関利用、会食、イベント開催には様々な条件が示されています。この新型ウィルスは、神様が造られた人間の根幹の一つ「他者と集まり、人格的交わりを通して喜ぶ」ことを邪魔するように変化し、働いているかのようです。これは何を意味するのだろうかと思ひめぐらしています。一方、ここ数年、インターネットでのTV会議機能が格段に進歩していました。昨年まで海外の人との会合だけに使っていたzoomが日本にいる人同士のやり取りに普通に用いられることに舌を巻いています。当たり前だった「リアルでの他者との人格的交わり」の意義を、もっと深く考えるように神様が促されているときなのかもしれません。

この激動の時期、私にもう一つの「神のとき（カイロス）」の深遠な出来事が与えられました。

## 「神のとき（カイロス）」その4

### ～地上の父、天に召される～

昨年の今頃、皆さまにお届けした「祈りの通信」に「父の体力が回復し、また一緒に礼拝に参加できる」ように祈っていると記しました。リハビリでかなり体を動かせるようになっていた父でしたが、5月に脳梗塞を再発し、コロナ感染対応で緊張感あふれる非常態勢の病院に入院しました。2週間後、医師から「再発なので右半身の麻痺は残り、もう動かない」と告げられました。退院書類を待つ病棟ロビーで、急に涙が溢れました。「体を支えられない父と、地上でもう二度と一緒に礼拝に行けない！2年4か月過ごした恵みの時間が終わった」という現実胸がいっぱいになったのです。

退院後、老健施設に入所した88才の父は食欲がないまま7月末、「私のところに來なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」とイエス様に呼ばれ、穏やかにスッと召されました。コロナ禍でしたが、看取りの最期の3日間、直接面会を許され、家族それぞれが父に会い、言葉をかけることができました。医師が「あと数日は大丈夫」と言った日が最期の日になりました。山あり谷ありのありふれた家族でした。このメンバーだったことの恵みが満ち、父の耳元で「素晴らしい家族だったね。ありがとう。」と私は心から伝え、祈りました。耳は最後まで聞こえるそうで、父の顔がホッと見えました。それから2時間も経たないうちに、父は主の呼びかけを理解したかのように少し長い息を吐き、旅立ちました。

3か月が経ちました。まだ、事務手続きや遺品整理が続いています。その中に初めて見る壮年の祖父母のセピア色の写真までありました。写真を整理するうちに、各時代を導かれる主

が、名もないこの家族をも、ご自身の壮大な物語のなかで時代を支える貴い一筋の糸として編み込み、導かれていたことを感じました。

### <ファミリーヒストリー：日本の近代化・工業化を支える名もない家族の物語>

私の母方の祖父は19世紀終わり、群馬県安中（あんなか）の農家の次男として生まれました。重い米俵を持ち上げる村一番の力持ちとして知られたようです。次男だった祖父は農地を受け継がないため、成人した大正初期に入づてに上京し、数字に強かったことから省線（鐵道省線、現在の JR）と呼ばれた、当時まだ環状線ではな



かった山手線の運転士になりました。（写真：昭和12年の鐵道省身分証）

1930年代始めに生まれた母は、大崎駅近辺の鐵道省の「官舎」（公務員住宅）で暮らし、毎日、山手線を見て育ったようです。

明治、大正、昭和初期と日本の都市は農村であぶれた次男以下の若者を労働者として吸収し、經濟発展に動員したのでした。祖父はその中で都市に欠かせない大量輸送の一角を担ったのです。日本の近代化、発展のために貢献した名もない民衆の一人でした。戦争中は空襲警報を聞くと昼夜を問わず、電車を守るため官舎を飛び出したそうです。一方、妻となった祖母の父は銀座で事業をしていました。祖母は生まれながらの都会っ子で、歴史ある泰明尋常小学校を卒業しました。ただ、羽振りの良かった父親が若くして急逝するとすぐ、親戚の家の家事手伝いに行った苦勞人でした。

現代社会は今までにないほど変化が激しいと思いがちですが、祖父母が育った時代も「近代化」の大きなうねりの中、前例がなく、人々は新たな道を切り拓くように求められていました。

私の父も群馬県安中の出身です。父は農家の五男として1932年に生まれました。やはり受け継ぐ農地はないので、戦後、商業高校卒業後、上京し、経済復興に沸くなか、工業用ワイヤーを製作する会社に勤めました（写真：工場での父）。東京で生まれ育った母は戦時中、旧制女学校から工場に毎日、動



員され、勉強の時間はほとんどなかったそうです。女学校を卒業すると、東京駅近くで店を構えた叔母夫婦の写真現像の手伝いに呼ばれました。米軍が日本を朝鮮戦争の後方休養地とし、米軍人が次々に写真の現像に訪れ、元敵国だったアメリカ人を相手に店は繁盛したそうです。やがて、母は会計事務所に勤め、結婚まで働きました（写真左）。

明治後期から昭和にかけての激動の時代、大農地所有者で成り立つ農業社会が近代化の道を進む中、人が集まる都市東京に新しく求められた仕事のスキルを身に着け、日々の糧のため懸命に働くことで近代化に貢献した祖父母。戦後日本の経済成長の時代、何も所有していなかった私の両親は、焼け野原から立ち上がった大都市東京が生み出した新たな数多くの仕事の機会の一つに参加し、より良い生活を目指して懸命に働いたのです。

祖父母、そして父母の若き日の写真を通して、明治以降、西洋社会に追いつこうと新たな「国

家像」を追求した野心に燃える人々が進めた近代化の過程で、創出されていく新たな仕事に参加し、より良い暮らしを求めて努力を重ねた多くの名もない人々がいたのだと思いました。

主が許されて導かれた日本の近代化、経済成長の一端を担い、豊かな暮らしを目指してがむしゃらに働く名もない人々に、主はどのような眼差しを向けておられたのでしょうか。

母方の祖父、そして私の父の出身地の群馬県安中は、キリスト者として同志社大学を創設した新島襄の出身地です。新島は安中の下級武士の家庭に生まれ、広い世界を見たいと1864年に密出国後、アメリカでビジョンを与えられました。「日本に聖書の真理を土台とした教育機関を作りたい。」同志社大学の始まりです。新島は1878年、群馬県初の教会が創立される礎の聖書読書会を始めました。これほどキリスト教とゆかりの深い安中生まれの祖父も父も、郷里で主イエスと出会うことはありませんでした。

一方、東京で生まれ育った母は小学高学年でキリスト教に触れていました。母の同級生の一人がクリスチャン家庭の子だったからです。太平洋戦争が勃発した年、母は10か月ほど友人と日曜学校に通ったそうです。賛美歌も覚えました。けれども、官憲の検閲が厳しくなり、敵国宗教とみなされた教会は閉鎖され、同級生の家族も引っ越していったそうです。母のキリスト教とのつながりは、そこで一度途絶えました。

それから40年近くが過ぎ、父母となった二人にイエス様を持ち込んだ！のは、大学受験で主との出会いを経験し、教会に通いだした娘の私でした。成人した娘がクリスチャンになった当時、父は「家で耶蘇になったヤツはいない！」と立腹し、しばらく口を利いてくれませんでした。13年後に妻がクリスチャンになり、教会に通いだしても教会とは距離を置きました。

父への主のときは、妻が召されてから訪れました。安中出身で同志社を創設したキリスト者新島襄や群馬県初の安中教会を調べていた私の教会のかたが声をかけて下さり、2010年に一緒に安中を訪れたのです。父は、安中を案内できることがとても嬉しかったようでした。その訪問から、キリスト教とは無縁だと思っていた自分の郷里が、実は日本のキリスト教の先駆者の一人を生み出していたという事実に目が開かれたのです。日本人としての「今までの共同体感覚」からキリスト教に反発してきた父が、主イエス・キリストとの「共同体」としてのつながりを認識したときでした。自分のペースで物事を咀嚼する父は、主イエス様から遠く離れて周回する軌道の距離を少しずつ縮め、2017年ペンテコステに85才で、主の体の一員となる洗礼を受けました。

神様は地球上のそれぞれの民族、その民族に属する名もない家族とその一人一人を導かれていました。その歴史には、人々が生かされて主が喜ばれる部分もあれば、人々が虐げられ、いのちを脅かされたために主が悲しまれる部分もあります。ときに荒波に揉まれるように転換していく社会で、ひっそり暮らす名もない無数の家族を主は深い思いで導かれていました。目を上げさえすれば、いつも共におられる主の憐れみのみ手に気づけるのですが、主はそのタイミングを決して押しつけられないのです。その人に相応しいペースと方法で、主イエス様は一人ひとりに出会ってくださるのでした。

父の召天は、民を導く主が名もない無数の家族を導き、社会の一端で用いてくださり、時が

くると出会うと下さる忍耐と慈しみにあふれるかたであることを確認する機会になりました。厳かな思いで、主のみ名を崇めています。

## 人：被造物の管理者として立たされて

10月末、新首相が「2050年、温暖化ガスゼロ排出」を日本国内で達成すると発表しました。政府としての具体的道筋は示されませんが、市民すべて、特に神様から託された役目を知るキリスト者には、待たなしの重大な時であることを思わされます。その中、被造物ケアとして生態系循環型農法を営み始めたS姉夫妻のもとを訪れました。今回は、作った巣箱に日本ミツバチが住みつき始め、

とても嬉しいと語ってくれました（写真：冬場に蜂が死なないように砂糖水やり）。

蜂蜜提供

だけでなく、作物の受粉という大切な循環の役割を担うミツバチたち。人間には神様が造られた壮大で緻密なこの地球生態系を慈しみ、貴んで管理する大切な任務を与えられていました。祖父母、父母、そして私たちが生きるそれぞれの時代に、その時代の大切な役目を人々に示され、導かれる主。

その主の微かな声を聞き、主に従う意味を深める時代の転換期を皆さまと共に歩める幸いに励まされています。心から感謝して、それぞれの賜物を生かされる主の祝福をお祈りしつつ。

柳沢美登里

2020年11月7日



「声なき者の友の輪・Friends with the voiceless International (FVI)」の働きのためにお祈り、ご支援をよろしくお願いたします。活動報告は随時、ホームページ <http://www.karashi.net> でご覧いただけます。「柳沢支援」は右記へお願いたします。郵便振替：名称 FVI 口座番号 00180-0-300201